

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	持続可能な利用のための伝統的技術の保存、新たな利用技術の開発
手法名	「聞き書き」を通じた里地里山文化の継承と活用
主体	共存の森ネットワーク(なりわい創造塾)
背景(地域の課題)	<p>里地里山の技術や知恵は農林水産業と不可分のものであり、人々の経験や背景、多様な生活の様式を反映したものとして蓄積されている。</p> <p>農業に携わっていない若者たちにとって、個人的経験の蓄積で成り立つ里地里山文化の継承は、一般的理解だけでは難しい。また里地里山保全活動においても過去にさかのぼって生業を見つめることや里地里山の明文化されていない様々な題材をも扱うことが重要となる。</p>
手法／方策の詳細	<p>聞き書きは、里地里山に生きてきた人々の生業に密着して暮らしの実情を把握し記録することができ、多様な題材のもとで、様々な志向性を持つ次世代への文化継承を促す手法となりうる。</p> <p>1) 聞き書きの技法 取材者とのやり取りの記録から取材者の質問部分を全部消し、相手の答えた言葉だけで物語を作る。小見出しをつけたり、順序を入れ替えたりして物語として読めるようにする。文体は「私が」、「僕が」というように主語がつくものとなる。</p> <p>2) 世代を越えた交流と継承 高校生たちによる森の聞き書き甲子園は、世代を超えて森の恵みや技術を継承する取り組みであり、話し手・聞き手双方に大きな影響を与えている。 ※共存の森ネットワークの森の聞き書き電子図書館のホームページ http://www.kyouzon.org/library/</p> <p>3) 過去にさかのぼって暮らしや生き方の実像を把握 映像や写真と異なり、文章にすることは話し手の子どもの頃、時には話し手の父親・祖父の時代などより過去にまでさかのぼり里地里山の状況と仕事や暮らしとの関係を描き出すことができる。</p> <p>4) 技術・知恵・考え方を明文化・視覚化する効果 聞き書きでは、話し手は質問に対し映像などの力を借りずにすべて自分の言葉だけで説明をすることになる。このことは、それまで文字に表されていなかった考え方、技術や知恵が聞き手だけでなく、話し手本人にも再認識させる効果を持っている。</p> <p>5) 若者への生業の継承ー話し手・聞き手の関係作りー 仕事を題材に質問することで、里地里山と生業の関係が個人の経験の中で浮き彫りにされ、そこに含まれる社会観をも理解できる。聞き書きは話し手・聞き手が協力して進める必要があることから双方の関係作りにもつながる。</p>
手法・技術的視点	<p>聞き書きは、里地里山の多様な生業と暮らしの様式やこれから関わろうとする個人のニーズを効果的に把握・収集することができ、課題とその可能性をより具体的に浮き彫りにして保全再生計画づくりに活用することができる。</p> <p>このように現世代から次世代へ文化を継承することが可能である。</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">写真 森の聞き書き甲子園における聞き書き (提供: 共存の森ネットワーク)</p>	
参考資料	<p>里なび研修会in群馬 作家/NPO法人共存の森ネットワーク理事長 塩野米松 『木の教え』(ちくま文庫) 『木のいのち・木のこころ』(新潮社) 『聞か！からはじめる森づくり』(NPO法人 共存の森ネットワーク)</p>